

記念講演 11月1日 に姜尚中氏(東京大 名誉教授)



姜名譽教授は最近、東アジアでの漱石への関心の高まりを感じ、漱石と、それに続く中韓の2人の文学者のかわりを探りました。

見えてきたのは、両国の近代文学の誕生には漱石の影響

本会の発足10年記念の第5回「夏目漱石のつどい」講演と朗読の主企画です。広島国泰寺高校放送部による『夢十夜』2編の朗読もあります。

本会が10周年に

響があつた、ということ。講演では、漱石に私淑した魯迅(中国)、李光洙(韓国)の二人

楽しみつづ学んだ

「漱石と広島」の会が2015(平成27)年に誕生して10年。この間、核になって動き、『漱石と広島』も著したのが富沢佐一世話人である。会にはどんな意味があり、何を残してきたのだろう。あらためて振り返ってもらった。

ひとことと言えば、「漱石」をキーワードにさまざまなことを楽しみながら学んできた。

教え子や親友など漱石に連なる多数の人脈を掘り起こして見えてきたのは、漱石の大きさや人間的な魅力、時代の中での格

闘や果たした役割などである。それが今の時代に連なっていることも実感できた。

教え子の加計正文(加計家22代当主)や妹尾福松(元旧制中学校長)の家では、肉筆の手紙が表装され「家宝」になっていた。

「漱石と広島」展にも出品した妹尾家の屏風には、教え子の就職先を世話する漱石の温かさや思いやり、律義さがにじむ。加計家の手紙には、励ましやユーモア、社会への怒りなども率直に書かれ、人間漱石を実感させる。

一時旧制呉中学(現三津田高校)に在籍した田中菊雄(英和辞典編集者)は、教え

「漱石は東アジアの共通文化財」

漱石に関する著作などで知られる姜尚中・東京大学名誉教授Ⅱ写真Ⅱによる講演会「漱石は東アジアの共通文化財」(中国)・李光洙(韓国)とのつながりを、11月1日(土)午後1時半から、広島市中区袋町の市まちづくり市民交流プラザ北棟5階の研修室で開きます。本会と市立中央図書館の共催で、無料です。(石田信夫Ⅱ世話人)



2025年(令和7年)
9月15日発行
「漱石と広島」の会

の先駆者に即して明らかにしていきます。

漱石文学は、日本にとどまらず東アジアで分かち合える共通の「文化財」という姜名譽教授は、「漱石を通じて日中韓3カ国の文化の『広場』について語りたい」と話しています。

「漱石のことは『悩む力』などの著書の中で、姜名譽教授は、漱石は自分のメンターだった、と吐露しています。

学生の頃、イケイケの世の中になじめず、漱石の言葉が救いになりました。「私は寂しい人間ですが、ことによるとあなたも寂し

い人間じゃないですか」「(こころ)。寂しい人間だけに分かる言葉を投げかけてもらった原体験が、後の支えになったといえます。

日本が近代国家として前のめりに「発展」を目指した時代。漱石の感じた「寂しさ」は、時代の「虚しさ」へのなじめなさだったと思われる。

それは姜先生の「なじめなさ」とも通じ、明治以来の来し方に何らかの違和感を持つ今の人も響くでしょう。

明治から現代までの長い射程で、漱石の意義を国内外からとらえ直す講演になりそうです。

子ではないが作品をむさぼるように読んだという。列車の「ボーイ」からスタートし、猛勉強で大学教授になり多数の著書を残した。心のばねにしたのは漱石だった。

教え子の妹尾や金子健二(英文学者)も教育界で人材を育てた。

鈴木三重吉や芥川龍之介が漱石によって世に出たのは広く知られる。鈴木は児童文学へ転向し、雑誌『赤い鳥』で童話を文学に高めた。

龍之介は東京生まれだが、実父の新原敏三が岩国市出身とは、地元でもあまり知られていない。

さらに漱石の妻鏡子は福山藩士の家の